

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代朝鮮語の前項動詞の語尾 { 기 } + 後項動詞「 시작하다 」について : 本動詞「 시작하다 」との関連を中心に
Author(s)	李, 暲洙
Citation	ニダバ , 25 : 8 - 17
Issue Date	1996-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047983">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047983</a>
Right	
Relation	



# 現代朝鮮語の前項動詞の語尾 {기} + 後項動詞 「시작하다」 について

— 本動詞 「시작하다」 との関連を中心に —

李 暎 洙

## 1.はじめに

現代朝鮮語の特徴の一つに、動詞と動詞の結合表現がある。その中に前項動詞の語尾 {아} + 後項動詞または、前項動詞の語尾 {고} + 後項動詞がある。これらは朝鮮語の文法では補助用言<sup>(1)</sup>と言われている。他方、同じ動詞の結合形態である前項動詞の名詞形語尾 {기} + 後項動詞の場合があるが、この {기} の結合形態は {아} {고} の結合形態よりその位置づけは明確ではない。そこで、一つの例として先行研究ではあまり取り扱っていない前項動詞の名詞形語尾 {기} + 後項動詞 「시작하다」 (以下、-시작하다) の文法的性格を明らかにしたい。研究方法としては小説、シナリオ、論説文などの資料から「-시작하다」の用例を収集し、それらの用例を検討しつつ分類・分析を行う。研究に用いた資料は日・韓翻訳本の資料20冊である。その中で韓国語の原典資料から得た「-시작하다」と日本語の原典資料を韓国語で訳された「-시작하다」を中心に考察していくことにする。また「시작하다」<sup>(2)</sup>の本動詞の意味は『우리말 큰사전a』『우리말 큰사전b』『조선어대사전』『조선어사전』に現れた用例を参照した。部分的には内省による例も付け加える。

## 2. 本動詞 「시작하다」 用法の特徴

現代朝鮮語の시작「始作」はものの最初の意味であり、끝「終結」の反対の意味を表すものと見てよいだろう。また「する」に当たる「하다」が付くと他動詞になり、「なる」に当たる「되다」が付くと自動詞になる。つまり「始作하다」は「始める」の意味であり、「始作되다」は「始まる」の意味である。また「始作하다」の反対語は「끝내다」であり、「始作되다」の反対語は「끝나다」である。このように自他のペアを持っている「시작하다」動詞の性質について分析を試みる。

- (1) 나를 보지않고 거실 방바닥의 한 점을 응시하면서 먼 옛날을 회상하듯이 이야기를 시작했다. (유회)

私を見ず、居間の床の一点を見つめながら、遠い日を思い出すようにして、話をはじめた。

- (2) 어른들이 다음다음 돌아가시자 그때까지 들어앉아 한문책만 읽고 있던 종근형이 별안간 머리를 꺾고 양복을 입고 기생출입을 시작하였다 (창랑정기). 目上の人達が次々と亡くなると、それまで引き篋って漢文の書籍ばかり読んでいた宗根兄はにわかに髪を切り洋服を着て芸者遊びをはじめた。

(3) 그 후로 그림을 그만 두고 임의로 하던 알이바이트도 그만 두고 회사 근무를 시작했다(Y의 초상).

あれから絵をやめ、不定期なアルバイトもやめて会社勤めをはじめた。

(4) 도루의 다리를 더 튼튼하게 해 주고 싶다. 그런 기분에서 땀박질을 생각해내고, 시작했던 것이다(푸른바람).

徹の足をもっと丈夫にしてあげたい、そんな気持ちからかけっこを考え出し、始めるようになったのだった。

(1)의 이야기를 시작했다, (2)의 기생출입을 시작하였다, (3)의 회사 근무를 시작했다, (4)의 땀박질을 생각해내고, 시작했던 것이다はすべてが目的語を持つ場合である。また「을(を)」格を要求しつつ他動詞の文だけで使われていることが分かる。さらに主語においては無情物主語は一つもなく、ほとんど有情物主語である。これは「 시작하다」가他動性を持つ他動詞であるという事実を裏付けることにもなる。しかし本動詞「 시작하다」とは異なる「- 시작하다」は必ずしも他動詞性を持つ他動詞であるとは言いがたい。例えば,

(5) 햇빛이 점점 약해져서 약한 쌀랑한 바람이 불기 시작했다. (붓짹)

日の光が段々弱って来て、少しはひやりとする風が吹き出した。

(6) 슈오우래는 부대를 이끌고 숙주의 성에 돌아오자, 그때부터 눈이 떨어지기 시작했다.

朱王礼は部隊を率いて肅州の城へ戻った、その頃から雪が落ち始めた。

(7) 그러던 중에 굵은 빗방울이 나를 때리기 시작했다. (이즈노오도리꼬)

そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。

(8) 시마무라가 다시 보고있자니, 여자는 고다쯔판자의 덮개 위에서 손을 핏기 시작했다(설국).

島村が眺め直していると、女は炬燵板の上で指を折り始めた。

(5)의 바람이 불기 시작했다고(6) 눈이 떨어지기 시작했다고は「이(가)」格を要求する自動詞であり、主語も有情物でない無情物である。さらに(7)の場合は主語が無情物であるが、「을(를)」格を取る他動詞である。しかし、(8)の場合は(7)とは異なり、有情物主語であり、「을(를)」格をとる他動詞である。このように本動詞として使われている(1)から(4)まではすべてが有情物主語を持つ他動詞であるが、(5)から(8)までは無情物主語であったり有情物主語であったり「이(가)」格を取ったり「을(를)」格を取ったりする自・他動詞の両用性を持っている。そこでこのように様々な属性を見せる要因は何であるかを調べる。

## 2. 前項動詞の語尾 {기} + 「 시작하다」文の特性

前項動詞の名詞形語尾 {기} は日本語の前項動詞の連用形と類似している。朝鮮語では「보문소」(complementizer)と扱っているのが一般的である。前項動詞の名詞形語尾

{기}と組み合わせられる用言(動詞と形容詞)は様々である。例えば, 「싫다(いやだ)」, 「좋아하다(好きだ)」, 「어렵다(-にくい)」, 「쉽다(-やすい)」, 「좋다(いい)」, 「나쁘다(わるい)」, 「계속하다(-続ける)」, 「시작하다(-始める)」, 「바라다(願う)」, 「끝나다(-終わる)」などである。これらの中で「시작하다」が使われる文の特性について調べてみる。

### 3.1 主語が有情物の場合

(9) 두 젊은이는 고개를 흔들었다. 그러자 쥬키치가 이야기하기 시작했다 (시오사이). 二人の若者は首を振った。そこで十吉が語りだした。

(10) 술이 들어오자 넷은 술에 굶주린 사람처럼 퍼마시기 시작하였다 (바보들의 행진). 酒がテーブルに届いた。四人は酒に飢えていたかのように、がぶ飲みを始めた。

(11) 철새가 갑자기 여러마리 울기 시작했다 (설국). <つわむしが急に幾匹も鳴き出した。

(12) 나는 안심하고 남자와 함께 걷기 시작했다 (이즈노오도리꼬). 私はほっとして男と並んで歩き始めた。

(9)の主語は쥬키치であり, (10)の主語는넷であり, (11)の主語는철새であり, (12)の主語는나である。このように主語が第三者であったり話し手であったり生物の昆虫であったりする。これらはいずれも本動詞「시작하다」と同じように有情物の主語を有する他動詞である。しかし, 本動詞「시작하다」とは異なり無情物が主語である場合も存在している(以下3.2)。

### 3.2 主語が無情物の場合

(13) 약 삼정쯤 왔다고 생각될 때, 저쪽에 사람그림자가 보이기 시작했다 (붓장). 約三丁も来たと思ったら, 向に人影が見えだした。

(14) 이미, 하얀 빛이 사변에 표류하기 시작하고 있었다 (돈황). 既に, 白い光が四辺に漂い始めていた。

(15) 바람이 그치고 화창하게 햇빛이 나기 시작했다 (시오사이). 風が止み, うららかに日が照りだした。

(16) 병태의 마음은 팽이처럼 달아오르기 시작했다 (바보들의 행진). 病泰の心は, 早鐘のように, 激しく鳴り始めた。

(13)の主語는사람그림자であり, (14)の主語는빛であり(15)の主語는햇빛であり(16)の主語는병태의 마음である。このように(13)から(16)までの主語は無情物であるとともに抽象的なものである。よって主語が無情物であるから話し手の意志と関係なく, 「시작하다」の前にくる前項動詞はすべてが自動詞になる。さらに主語が無情物なので「を」格をとりにくいのである。

### 3.3 「을(를)」格を取る場合

(17) 오후의 따가운 햇살을 피하기 위하여 커튼을 내린 방 안에서 이소베는 병에 조금 남아있던 위스키를 컵에 따라 마시기 시작했다 (깊은 강).  
午後の陽射しをさけるため、カーテンをしめきった部屋の中で磯辺は瓶に少し残ったウィスキーをコップに入れて飲みかかっていた。

(18) 사내는 소리를 बारबार 지르기 시작하였다 (바보들의 행진).  
男はワーワー声を張り上げ始めた。

(19) 빨간셔츠는 또 파이프를 막기 시작했다 (붓장).  
赤いシャツはまたパイプを拭き始めた。

(20) 입을 다문 채로 있던 유희는, 꿈지락꿈지락 무릎 위에 놓인 손가락을 움직이기 시작했다 (유희).  
口をつぐんだままだった由熙は、もじもじと膝にのせた指を動かし始めた。

(17)의 마시기 시작했다の主語は이소베で目的語は위스키である。(18)의 지르기 시작하였다の主語は사내で、目的語は소리である。(19)의 막기 시작했다の主語は빨간셔츠で、目的語는파이프である。(20)의 움직이기 시작했다の主語は유희で、目的語는손가락である。このように(17)から(20)までの主語は有情物であり、目的語を要求する他動詞文である。つまりこの「-시작하다」文は他動性の構造を持ち、有情物の主語であることが分かる。しかし、必ず有情物が主語で他動性を要求する他動詞文であるとは言いきれない。次の文は自動詞を要求する自動詞文である (以下3.4)。

### 3.4 「이(가)」格を取る場合

(21) 이튿날은 새벽부터 손님들이 오기 시작했다 (창랑정기).  
翌日は明け方からお客さんたちが来はじめた。

(22) 얼마 후 소나무숲 모래땅 저편으로 3층짜리 철근 콘크리트 관망초소가 보이기 시작했다 (시오사이).  
やがて松林の砂地のかなたに、三階建ての鉄筋コンクリートの観的哨が見えだした。

(23) 다시금 분한 마음이 솟아나와 몸이 떨리기 시작했다 (유희).  
また口惜しさがこみあげ、からだが震えだした。

(24) 두 사람 사이의, 두 사람 주변의 공기가 흐르기 시작한다 (Y의 초상). 二人の間の, 二人のまわりの空気が流れ始める。

(21)から(24)までは「이(가)」格を要求し、「시작하다」の前にくる動詞はすべてが自動詞であることが分かる。主語と前項動詞とは共起するが、主語と「시작하다」とは共起しない。たとえば、(21)のように손님들이 오다とは共起するが、손님들이 시작하다とは共起しない。(22)(23)(24)も(21)と同じ様に考えられる。また前項動詞すべてが自動詞である。しかし、これらは前項動詞の後に目的格助詞「을(를)」を入れると全体が他動詞文にもなる。例えば、(21)の場合は손님들이 오기를 시작했다になり、(22)の場合は초소들이 보이기를 시작했다になり、(23)の場合は몸이 떨리기를 시작했다になり

り、(24)の場合は 주변의 공기가 흐르기를 시작했다になる。

上の(17)から(24)までの文は「-시작하다」文を中心に語の性質を調べたものであるが、有情物主語で、「を」格をとる本動詞「시작하다」とは異なり自動詞文・他動詞文・有情物主語・無情物主語を要求する構造であることが分かる。この要因は「-시작하다」はひとかたまりの複合動詞ではなく、文法的性質を持つ統語的複合動詞であるからである。その根拠は以下の4節で述べる。

#### 4. 前項動詞の語尾 {기} + 「시작하다」の統語的特徴

次に「-시작하다」が複合動詞を構成している統語的特徴について調べてみる。複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けられる<sup>(3)</sup>。前者は文法的性質を持っている場合であり、後者はひとかたまりの語彙的性質を持っている場合である。その中で「-시작하다」は統語的性質を持っている複合動詞であるか、ひとかたまりの複合動詞であるかを調べる。まず文法的要素の尊敬語尾 {시} と受身 {이, 히, 리, 기} を入れ、文に大きな影響がなければ統語的複合動詞とする。つまり統語的複合動詞の特徴は二つの文章の接続のように使われていれば、二つの動詞の間に様々な文法的現象を見ることができるのである。また、意味の面においても前項動詞を補助する補助的役割をしていると見ることができる。

##### 4.1 尊敬語尾 {시} の介入

尊敬語尾 {시} の介入を語尾 {기} の前に置くか語尾 {기} の後に置くかに分けて調べる。ここで尊敬語尾 {시} の介入の可能・不可能を対象にしたのは二つの動詞の間に尊敬語尾 {시} の介入が可能であるというのは、ひとかたまりの複合動詞ではないかということとつながるのである。

##### 4.1.1 前項動詞の尊敬語尾 {시} + 語尾 {기} + 「시작하다」

(25) 그러자 두 사람은 낮은 소리로 무엇인지 이야기를 하기 시작했다  
(못짱). すると二人は小聲で何か話し始めた。

(25') 그러자 두 사람은 낮은 소리로 무엇인지 이야기를 하시기 시작했다  
(못짱). するとお二人は小聲で何か話され始めた。

(26) 그리고는 어제 큰 시어머니에게 배웠다는 이 섬에 전해 내려오는 우  
란분재의 이세 가락을 해삼을 썰면서 부르기 시작했다 (시오사이).  
そして昨日伯母から教わったという、この島に伝わる盆踊りの伊勢音頭を、なまこ  
を切りながら歌い出した。

(26') 그리고는 어제 큰 시어머니에게 배웠다는 이 섬에 전해 내려오는 우  
란분재의 이세 가락을 해삼을 썰면서 부르시기 시작했다 (시오사이).  
そして昨日伯母から教わったという、この島に伝わる盆踊りの伊勢音頭を、なまこ  
を切りながら歌われ出した。

上の(25') (26') は前項動詞のあとに尊敬語尾 {시} を介入した場合である。その結

果, 尊敬の語尾 {시} を介入してみても文には大きな影響はなく, そのまま文全体が尊敬の意味になるのが分かる。(25') の「이야기하시기 시작하다」は「이야기하시다」と「시작하다」の二つの文であり, (26') の「부르시기 시작하다」も「부르시다」と「시작하다」の二つの文である。しかも前項動詞だけで独自の主語を持つことができる。後項動詞「-시작하다」は前項動詞を修飾したり補助したりする役割を持っている補助動詞の役割をしている。

#### 4. 1. 2 前項動詞の語尾 {기} + 尊敬語尾 {시} + 「시작하다」

(27) 그리고 조용한 음성으로, 8월 한 달 동안 신경쇠약으로 허송세월하고 있었다는 얘기를 하기 시작했다 (설국).

そして静かな声で, 八月いっぱい神経衰弱でぶらぶらしていたなどと話し始めた。

(27') 그리고 조용한 음성으로, 8월 한 달 동안 신경쇠약으로 허송세월하고 있었다는 얘기를 하기 시작하셨다 (설국).

そして静かな声で八月いっぱい神経衰弱でぶらぶらしていたなどと話し始められた。

(28) 다리아래의 킁킁한 사주를 점점 빠른 걸음으로 걷기 시작했다 (동물)  
橋の下のうす暗い洲を, いよいよ足早に歩き始めた。

(28') 다리아래의 킁킁한 사주를 점점 빠른 걸음으로 걷기 시작하셨다 (동물)  
橋の下のうす暗い洲を, いよいよ足早に歩き始められた。

(27') (28') は尊敬語尾 {시} を前項動詞の語尾 {기} の後に介入した場合である。尊敬語尾 {시} を介入した場合の文を意味的に見た時, 尊敬語尾 {시} をつけることによって文全体が尊敬の意味になり, 自然な文になる。

以上のことから前項動詞の前または後への尊敬語尾 {시} の介入の可能・不可能は統語的複合動詞であるか語彙的複合動詞であるかを区別する基準にもなる。

#### 4. 2 受身の介入

「-시작하다」が統語的構造で形成される手掛かりとして前項動詞と後項動詞の間に受身の介在が考えられる。この受身についても「기」の前に置かれるか「기」の後に置かれるかを考えてみたい。

##### 4. 2. 1 前項動詞の受身 + 語尾 {기} + 「시작하다」

(29) 그것은 조행덕이 불교라고 하는 것에 새삼스럽게 마음이 끌리기 시작했던 것이었다 (돈황).

それは趙行徳が仏教というものに改めて心をひかれ始めたことであつた。

(29') 그것은 조행덕의 마음을 끌기 시작했던 것이었다 (돈황).

それは趙行徳の心を引き始めたことであつた。

(30) 거기에서부터 주민의 흐름은 성밖으로 밀려나기 시작했다 (돈황).

そこから住民の流れは城外へと吐き出され始めた。

(30') 거기에서부터 주민의 흐름을 성밖으로 밀기 시작했다 (돈황).

そこから住民の流れはを城外へと吐き出し始めた。

統語的複合動詞であるか語彙的複合動詞であるかの検証のため二つの動詞の間に受身の介入が可能であるか不可能であるかを考えてみた。上の (29) (30) は前項動詞が受身になった場合である。実際、受身文で使われている (29) (30) の文を中心に元の文に変換してみたものが (29') (30') である。(29') (30') を元の文 (29) (30) に変換してみても自然な文で成り立つことができるということが分かる。

#### 4.2.2 前項動詞の語尾 {기} + 受身 + 「 시작하다 」

(31) 건물은 솟아올랐고, 도로는 그 긴 모습을 비추어내고, 거기에 움직이고 있는 주민들의 모습은 모두 밝게 비쳐기 시작되었다 (돈황).

建物は浮かび上がり、路地はその長い姿をさらけ出し、そこらにうごめいている住民たちの姿はいっせいに明るく照らしだされた。

(31') 건물은 솟아올랐고, 도로는 그 긴 모습을 비추어내고, 거기에 움직이고 있는 주민들의 모습을 모두 밝게 비치기 시작했다 (돈황).

建物は浮かび上がり、路地はその長い姿をさらけ出し、そこらにうごめいている住民たちの姿をいっせいに明るく照らしだした。

(32) 밤이슬로 가득찬 풀밭 위에 던져지기 시작되는 것을 느꼈다(돈황).

夜露でしめった草地の飢えに投げ出されるのを感じた。

(32') 밤이슬로 가득찬 풀밭 위에 던지기 시작하는 것을 느꼈다(돈황).

夜露でしめった草地の飢えに投げ出すのを感じた。

(31) の「비쳐지다」の元の動詞は(31')の「비치다」であり、(32) の「던져지다」の元の動詞は(32') 「던지다」である。このように二つの文章ともに受身で使われているのである。前項動詞の語尾 {기} の前後に受身の介入というのは統語的複合動詞であるという手がかりである。

#### 4.3 助詞の介入

これまでの議論から、「- 시작하다」においては前項動詞と後項動詞になる尊敬の要素及び受身の要素を介在することができる。これら以外にも助詞の介入が可能か不可能かについて考えてみることにする。

##### 4.3.1 前項動詞の語尾 {기} + 格助詞「을」 + 「 시작하다 」

(33) 숙모와 유희는 매달 지불하는 금액에 대해서 이야기하기 시작했다 (유희). 叔母と由熙は月々払う金額について話し始めた。

(33') 숙모와 유희는 매달 지불하는 금액에 대해서 이야기하기를 시작했다 (유희). 叔母と由熙は月々払う金額について話しを始めた。

##### 4.3.2 前項動詞の語尾 {기} + 係助詞「도」 + 「 시작하다 」



(34) 그는 수필을 쓰기 시작했다(작례). 彼は随筆を書き始めた。

(34') 그는 수필을 쓰기도 시작했다(작례). 彼は随筆を書きも始めた。

(33') は格助詞「을(를)」を動詞と動詞の間に介入した場合であり, (34') は係助詞「도」を動詞と動詞の間に介入した場合である。このように格助詞・係助詞を介入してみても文には大きな影響はないことが分かる。

## 5. 「시작하다」 と 「-시작하다」 の語性のずれ

(35) 그러자 모두는 다시 평상시와 다름없이 시끄럽게 다른 화제를 시작했고, 오늘은 신기하게도 먼저 와 있는 지부장 야스오가 책상 저쪽에서 신지에게 짹짹하게 목례를 했다 (시오사이).

するとみんなはまた、いつものようににぎやかに別の話題を始め、今日はめずらしく先に来ている支部長の安夫は、机の向こうから新治に気さくに会釈した。

(36) 뗏상과 더불어 나에게 있어서는 수수께끼에 가까운 생활이 그 날 밤부터 시작되었다 (Y의 초상).

デッサンと同時に、私にとっては謎解きに近い生活がその夜から始まった。

(37) 그런 오만한 생각을 하고, 나는 내나름 대로 성서를 읽기 시작하고 있었다 (길은 여기에).

そんな傲慢なことを思って、私は私なりに、聖書を熱心に読み始めていた。

(38) 그런 어느날, 그것은 분명히 눈이 내리기 시작했던 경이 아니었나 생각한다 (길은 여기에).

そんなある日、それはたしか、雪が降り始めたころではなかったかと思う。

(39) 그리고 결국 모두는 어깨를 끼기도하고, 손을 잡기도 하면서, 줄을 서서 학교 주위를 돌기 시작했다 (창가의 돛도짱).

手をつないだりしながら、列になって学校の周りを、まわり始めた。

(40) 긴장이 점차로 풀리기 시작한다 (조선단편소설선).

緊張が次第に緩み始める。

上の(35)は本動詞「시작하다」の場合は「을」格をとる他動詞であり、主語は有情物(모두)である。また、(36)の場合は「이」格をとる自動詞である。この場合、主語は有情物であるとともに無情物である。しかし、本動詞「시작하다」とは異なり、主語が有情物(37)であるとともに無情物(38)でもある。また格も「을」格も(39)「이」格(40)もとる。つまり、本動詞とは全く異なる役割をしていることが分かる。ここで断っておきたいことは本動詞「시작하다」は単独ではほとんど使われず複合動詞との共起が極めて目立っていることが分かる。このような現象は他の複合動詞では見られない「-시작하다」の固有の性質ではないかと思われる。

## 6. おわりに

本動詞「시작하다」と複合動詞「-시작하다」の統語的特徴及び語性について調べてみ

た。その結果、本動詞「시작하다」の場合は有情物主語を要求し、目的語を持つ他動詞文で使われるのに対し、「-시작하다」の場合は本動詞「시작하다」と異なり、主語の有情物・無情物と「가」格・「을」格にこだわらず自由に使われる語の性質を持っていることが分かった。つまり、本動詞「시작하다」と異なる要因は複合動詞「-시작하다」は前項動詞と後項動詞の間に文法的要素を自由に介在可能な文法的性質を持つ統語的複合動詞なのである。言い換えれば、二つの動詞の間に尊敬語尾 {시} の介入と受身の介入が可能なことから語彙的ものではなく統語的な性質を持っている複合動詞であることが分かった。これらのことから前項動詞の語尾 {기} + 後項動詞（「시작하다」）は前項動詞の語尾 {아} + 後項動詞（버리다, 내다, 오다, 가다）と同じように統語的複合動詞の範疇で扱うべきであると考えられる。

#### 注

- (1) 朝鮮語の補助用言の分かち書きについて1988年1月14日文教部が確定発表した国立国語研究所の「한글맞춤법해설」によれば補助用言は分かち書きを原則とし、綴り書きも許容する。
- (2) (影山(1993:68))によればPerlmutter・Postal(1984)は「시작하다」に当たる英語の「begin」は非対格自動詞と取り扱っている。
- (3) 李(1995)では韓国語の統語的複合動詞と語彙的複合動詞の判別基準を示し、その区別を明らかにしている。

#### 用例出典

井上靖『敦煌』新潮社(1965)大江健三郎『飼育』新潮社(1959)黒柳徹子『窓際のトットちゃん』講談社(1984)堺屋太一『且本とは何か』講談社(1991)松本清張『且の壁』新潮社(1972)松本清張『点と線』新潮社(1971)三島由紀夫『金閣寺』集英社(1966)村上春樹『ノルウェイの森』(上・下)講談社(1991)夏樹静子『Wの悲劇』角川(1984)灰谷健次郎『兎の目』理論社(1985)原田康子『魔園』角川(1975)三浦綾子『道ありき』新潮社(1981)三浦綾子『続氷点』(上・下)朝日文庫(1985)李 良枝『유희』(1989)三新閣 李文烈『우리들의 일그러진 영웅』文学思想社(1987)金賢姬『이제 여자가 되고 싶어요』高麗園(1991)田麗玉『일본은 없다』知識工作所(1993)金東里『문녀도』東洋文庫(1977)金裕貞『동백꽃』三中堂(1983)李箱『날개』三中堂(1978)李孝石『메밀꽃 필 무렵』三中堂(1983)金東里『호남철수』語文閣(1984)李清俊『가수』三中堂(1984)黃順元『곡예사』一新書籍(1987)金東仁『갈자』大學書林(1981)李泰俊『보덕방』大學書林(1981)兪鎮午『청량정기』大學書林(1981)玄鎮健『윤수 좋은 날』大學書林(1981)

#### 参考辞書

大阪外国語大学朝鮮語研究会(1986)『朝鮮語大辞典』角川書店  
 油谷幸利 (他) (1993)『朝鮮語辞典』金星出版社  
 신 기철・신 용철(1986)『우리말 큰사전 a』三省出版社  
 한글学会(1994)『우리말 큰사전 b』語文閣

## 参考文献

- 今井忍(1993)「複合動詞後項の多義性に関する認知意味論によるアプローチ-「-出す」の起動の意味を中心に」『言語学研究』12号 京都大学
- 生越直樹(1984)「日本語複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的語句との関係」『日本語教育』52 日本語教育学会
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 塚本秀樹(1993)「複合動詞と格支配-日本語と韓国語の対照研究」  
『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 寺村秀夫(1969)「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト」『日本語・日本文化(その1)』1 大阪外大
- 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院
- 森田良行(1977)(再復刊1989)『基礎日本語』角川書店
- 姫野昌子(1977)「複合動詞「出る」と「出す」」『日本語学校論集』4  
東京外大付属日本語学校
- 김기혁(1987)『国語補助動詞의 研究』延世大学博士論文
- 김기혁(1995)『国語文法研究-形態・統語論-』도서출판 박이정
- 金 창섭(1981)「現代国語의 複合動詞研究」『国語研究』47 国語研究
- 국어연구소(1988)『한글맞춤법解説-文教部告示』韓国国語研究所
- 서정수(1978)「国語補助動詞」『言語』3-2 韓国言語研究会
- 서정수(1990)「韓・日两国語補助用言의 比較研究(1)」『거래문화』한국거래문화원
- 이기동(1976)「助動詞의 意味分析」『文法研究』3 塔出版社
- 양경모(1993)『日本語와 韓国語의 相關連形式들의 対照』서울大学博士学位論文
- 李暲洙(1994)「日・韓兩語における複合動詞の対照研究」『教育学部紀要』43-2 広島大学
- 李暲洙(1995)「韓国語の複合動詞に関する研究-統語的複合動詞と語彙的複合動詞の判別を中心に-」『教育学研究紀要』41-2 中国四国教育学会(投稿中)
- 崔絃培(1937)『우리말본』正音文化社
- Miller, G. D. (1993) Complex Verb Formation. Jonh Benjamins Publishing.
- Lee, Kee-Dong(1993) A Korean Grammer on Semantic Pragmatics Principles. Hankuk Moonwhasa.